

# 7 インテリア販売の戦略を企画する

資格取得でキャリアアップ。お客様満足度向上に育児経験も反映



**① シスコンショールーム エントランス** 受付カウンターをアール状にして、入ってくるお客様を受け止める形にした。カウンター脇のグリーンで空間にうおいを与え、鏡を入れて、広がりを出した。

**② シスコンショールーム ライブラリー & カフェカウンター** ライブラリー壁面にはイレギュラーな形の本棚を設置。カフェカウンターにはペンダントを2つ落として、お客様がここに集まりやすいようにした。

**③ オリジナルカーテンブック** 自社商品のカーテンを販売するためのサンプルブックも制作。インテリアイメージとサンプルを見やすく配置した。

## 住友不動産グループのインテリア商材をマネージメント

私が所属する会社、住友不動産シスコンは、住友不動産のインテリア部門を担っている会社で、マンションや注文住宅リフォームのお客様に対するインテリア販売が主な業務です。

その中で私が所属する企画部は、お客様にどのようなものを提供していけばよいか、あるいはショールームをどういう風につくり込んでいけばお客様をご案内しやすいか、ということを企画・検討して実施しています。グループ会社として、住友不動産のトータルなお客様満足度を高めるための提案をしていく部門という役割も担っているため、個性を控えつつもトレンドはしっかりと押さえた商品を提供していく必要があります。仕事に当たっては現状維持ではなく、常に新しいことに取り組むよう心掛けています。そのために、展示会や雑誌等での情報収集は欠かせません。新しい商材を見極め、それを会社としてどう販売していくか、展示方法や販売価格等の検討を行い、販売開始に向けて様々な問題を処理しながら実現化していきます。

最近では2017年の年明けにオープンする自

社のショールームの企画を手掛けました。

コンセプトは「インテリアに対する気持ちが高まる空間づくり」。単に商材が並べてあるのではなく、ゆったりとした受付まわりに大テーブルのあるライブラリーやカフェカウンターを設け、お客様がお好きなカタログを取って、コーヒーを飲みながらお話できる空間にしました。訪れたお客様が快適に過ごせ、最新の情報に触れることで、インテリアに対する気持ちを高めていただける。そんな空間にするというのがねらいです。

オリジナルカーテンブック（サンプルブック）も作成しました。自社商品のカーテンを販売するためのツールです。インテリアイメージのシーン設定、撮影場所の選定から撮影立ち会いまで行い、手ごろな価格の商品であってもインテリアに映えるページを創り出させて、カーテンメーカーに見劣りしないブックに仕上がったと思います。

## 出産や育児の経験を提案に付加させることができるインテリアプランナー

現在の部署につく以前は、数年間、二級建築士として現場に携わっていましたが、現場

## 馬場 香さん

インテリアプランナー、二級建築士  
住友不動産シスコン株式会社  
企画部 主任



### 《経歴》

香川県生まれ。2002年埼玉大学工学部建設工学科卒業。株式会社四季工房を経て、2006年、住友不動産シスコン株式会社入社。住友不動産グループのインテリア部門としてインテリア商材をマネージメントする企画部に所属。取り扱いメーカーの開拓からショールームの企画、運営、コスト管理まで幅広く担当。またフェアなどの新規の取り組みについては、企画から検討、実施までを担当し、ブランド戦略の一翼を担っている。

### 《実績》

- ・オリジナルカーテンブック企画
- ・ジスコンWEBSHOP立ち上げ
- ・クシスコンショールーム展示企画
- ・インテリアオプションカタログ企画
- ・インテリアオプションタブレットカタログ企画
- ・インテリアグリーン販売開始
- ・既成クッション販売開始

ほか多数

を経験するうちに、「インテリアに特化して仕事をしていきたい」という気持ちが大きくなり、インテリアプランナー資格の取得を目指しました。そして、3年間の仕事と受験勉強の両立の末に資格を取得したことを契機として、社内でインテリア部門への配属が決まり、当初望んでいた仕事に就くことができました。

私は今、子どもを保育園に預けて時短で勤務しています。出産・育児に関しては、産休・育休の制度と会社や周囲の理解があって乗り越え、仕事を続けられています。ショールームやオリジナルカーテンブックの仕事も、復帰後に担当し、子どもを抱えながらの時短勤務でも成果をあげることができました。

さらに、育児を経験することにより知り得たことをアイデアに反映でき、より広い視野で厚い提案が可能になったと思います。

産休・育休はインテリアプランナーとしても、もちろん、女性のキャリアデザインを描くうえで、「マイナス」と捉えることはないと考えています。